

山口大学施設内における美術作品展示プロジェクト (山口大学教育学部・附属学校〔山口・光地区〕)

中野 良寿^{*1}・平川 和明^{*1}・中村 賢太^{*2}・藤井 里奈^{*3}

Project for the exhibition of art works in Yamaguchi University facilities (Yamaguchi University, Faculty of Education, Affiliated schools [Yamaguchi and Hikari Districts])

NAKANO Yoshihisa^{*1}, HIRAKAWA Kazuaki^{*1}, NAKAMURA Kenta^{*2}, FUJII Rina^{*3}

(Received March 21, 2025)

キーワード：美術教育、美術作品、景観計画、空間デザイン、アートマネージメント

はじめに

筆者は過去に山口県の小中学校や大学、各市の庁舎などの公共建築における建て替えや改修についての事例を調査した。日本の戦後復興期以降におけるモダニズムを反映した鉄筋コンクリート建築の耐用年数や耐震基準については旧耐震基準から新耐震基準、2000年基準と更新されており、日本での災害があるたびにその有効性が検証されてきている。文部科学省のHPにもあるように平成27年度までの完了を目標として公立学校施設の耐震化の推進も国庫補助制度を使って進められてきた。

このように耐震対策などを中心とした建物の刷新に伴い、室内空間も刷新される機会も得ている。躯体そのものの機能性が問われることは第一であるがインテリアに関わる適切な新しい施策が求められているようにも思う。従来の建物におけるインテリアとしての美術作品（絵画、写真、版画、書、陶器など）は地域の画家などからの寄贈や来賓者の贈り物、施設管理者の購入、小中学校の場合は児童・生徒による共同作品によるものが多く、玄関、廊下、応接間、会議室、食堂などを飾ることが一般化している。場合によっては美術品そのものが、その場所の雰囲気とマッチしている場合は良いが、そうではない場合、その状態が固定化している例もあった。

本プロジェクトは上記のような事例があることを踏まえ、インテリアとして壁に掛けることができる作品（小品）に焦点を当て、(1)「様々な作品を鑑賞する機会の提供」、(2)「展示作品の固定化を避けること」を山口大学教育学部および附属学校園で展開する仕組みの提案である。

1. プロジェクトについて

本プロジェクトは山口大学教育学部、附属連携という趣旨を踏まえて、当初次のようなプロジェクト案を提案した。

■プロジェクト主旨：

本プロジェクトは山口大学教育学部および、附属学校園の校舎展示環境整備に関するプロジェクトであり、それぞれの施設の廊下や会議室、可能な教室などに美術作品を展示するプロジェクトである。

1) 共同態勢について：山口大学教育学部美術教室、山口大学教育学部附属学校（山口地区・光地区）との連携作業として行う。

* 1 山口大学教育学部美術教育選修 * 2 山口大学教育学部附属光中学校 * 3 山口大学教育学部附属山口中学校

2) 美術作品の収集方法 :

現在山口市庁舎が建て替え中であるが、2025年5月に旧市庁舎から新市庁舎に移転する。現在使用中の市庁舎は旧山口大学教育学部の学舎であったことから、建物の解体に際し、2025年の5月末に2週間ほど「さようなら旧市庁舎プロジェクト」を行う企画がある。それに参加できる作品を山口大学教育学部美術教育教室の過去、現在の関係者に呼びかけ、小品を提供してもらい、旧市庁舎で小品展を行いたい。しかし、その展覧会は2週間程度のため、終了後には美術教育教室に戻す予定であるが、その作品については山口大学教育学部美術教育教室、山口大学教育学部附属学校(山口地区・光地区)の廊下や教室、会議室などを展示場所として、学生(ゼミ生など)の協力を得て、できるだけ適切な場所に配置したい。

3) 本プロジェクトについては期間が令和6年度ということで2025年3月までに終了するということなので、まずは2025年の5月末のために作品を収集して、大まかな作品の配置案を考えておく。大まかな作品の配置案までをこのプロジェクト終了の報告として、実際は次年度の5月に小品展を行った後に教育学部と附属学校園の予定の場所に配置したい。

4) この小品群は美術教育教室で管理してあらかじめ「管理リスト」を制作しておき、美術教育教室のHPにリストを常備して希望作品を取り替えが可能である仕様にしたい。

1-1 1)における共同作業について

本プロジェクトにおける共同作業については、山口大学教育学部とその下部組織にあたる附属山口中学校、附属光学園の連携作業とした。作品の展示場所となる建物については山口大学教育学部は15年ほど前に耐震工事と建物改修を終えている状況である。また、附属山口小学校と附属光学園も数年前に耐震工事と建物改修を終えているが、附属山口中学校については、現在も改修途上であることもあり、実際の設置は改修工事が全て終了した後になる予定である。(令和6年度まで)

1-2 2)における美術作品の収集方法について

本プロジェクトの作品の収集方法として、新庁舎へ建て替え中の旧山口市庁舎での展示に向けた作品収集を行っている。市庁舎は2025年5月7日に新市庁舎に移転する。現在使用中の市庁舎は旧山口大学教育学部の学舎であったことから、建物の解体に際し、2025年の5月末に2週間ほど「さようなら旧市庁舎プロジェクト」を行う企画がある。このイベントのキャッチフレーズは「ハシヲワタス」としており、「ハシヲワタス: さようなら旧市庁舎プロジェクト」という名称でイベントを行う。現代アートの展覧会、カフェプロジェクト、アーカイブ企画、山口情報芸術センター(YCAM)からの出展や山口大学、山口県立大学、山口芸術短期大学、山口大学の同窓会からコーラスや音楽の企画もあり、山口市に関わる各方面からの実行委員会を組織している。その企画内容の一部として山口大学教育学部美術教育教室に関わる方からの作品提供を募集している(図1、図2)。主に現役の美術教育教室の学生が中心になるが、小品を提供してもらい、旧市庁舎で展覧会を行う予定である。展覧会は5月23日から6月1日の約2週間程度のため、終了後には山口大学教育学部美術教育教室に戻す予定である。その作品群を山口大学教育学部と附属学校園の廊下や教室、会議室などを展示場所として、学生(ゼミ生など)の協力を得て、できるだけ適切な場所に配置したいと考えている。

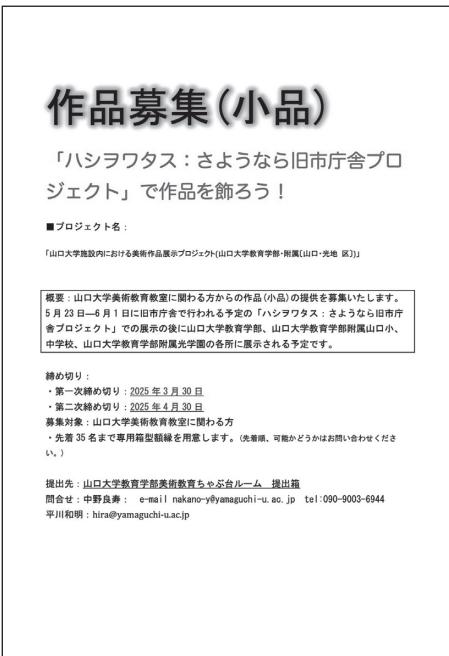


図1 募集案内(表)



図2 募集案内(裏)

1-3 3)における美術作品の展示構想案及び展示期間について

本プロジェクトにおける美術作品の展示については本年度は附属山口中学校が改修工事中であることもあり、構想と展示額縁のユニットの制作及び作品収集を目的としたい。次年度以降、先述の旧市庁舎におけるさようなら山口市旧市庁舎プロジェクトに向けて作品が集まり、その場所での展示を一の契機として作品群を確定して、その中から教育学部や附属学校の展示予定場所に希望の作品を振り分ける作業を行う予定である。

2. 箱型の小品の作品を収める額縁ユニットの制作について

今年度行ったプロジェクトの特徴として、単に小品の作品を集めることだけでなく、それらの作品を収める箱型額縁の基本設計のアイデアを思案することに時間を要した。それは当初既製品の箱型のデッサン額を使うことを考えていましたが、当初の額のサイズ感だと肝心の作品が小さくなりすぎることや、使われているアクリル板があまりにも貧しい質感のものしか用意されていないこと、全体に重厚感がなくせっかく集めた作品の存在感を示すのにあまり適しているように思われなくなってしまったことがある。他の同仕組みを持った既成の額縁を参考してみたところ驚くほど高価で、今回の予算からは多数の作品を集めることから外れてしまうことなどの難しさがあった。

そのため、コストパフォーマンスが優れており、質感などを吟味した素材を使い、オリジナルの設計で業者への発注部分と彩色やカット、金具や紐の取り付けなど手作業で補う部分を加えて安価に作ることに成功したため、40個程度の作品額を制作した。

2-1 額縁の試作品について

額縁のスタイルとしては箱型のデッサン額のスタイルが、ドローイングや写真、キャンバス、レリーフなど小品の作品を収めるのに適していると判断した。しかし、希望の大きさと質感を備えた額縁は安くても3000円から5000円ほどする場合が大半で、1000円から2000円程度の額縁については、塩化ビニール製であったり、アクリル板でも軽々しいものが多くて、折角の作品が生かされない危惧を感じた。当初の既成の額縁はある程度のクオリティーがあるので選んだものがあったが、サイズが小さすぎて展示した時の存在感が低くなることも気になった。その結果、比較的安価で質感も感じられるMDFボードと木材(杉材)、アクリル板などにより試作を行った(図3,4)。



図3 既成の箱型の額縁のバリエーション

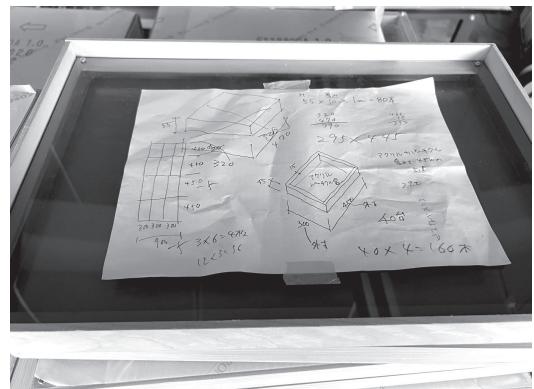


図4 試作の箱型額縁、MDF ボードなどを使用

2-2 額縁の実際の制作過程について

箱型の額縁については設計段階からコストパフォーマンスと制作過程における複雑さをできるだけ抑えたい旨があった。予算規模からして40枚の額縁を制作することとし、30cm×45cmのMDFボードのサイズを基準として枠組みにあたる部分や外枠のサイズ、アクリル板の取り付け方法を検討した。アクリル板の取り付けについては背面からの作品の挿入方法と前面から作品を挿入・設置する方法があるが、木工の細工の手間などを考慮し、前面からのビスでの取り付け方法にした。この場合、ビスが美的な観点から許容できるかどうかという判断があるが、一般的かつできるだけ目立ちにくく種類を選び採用している。また箱状であるため通常の額縁よりも厚みがあるため、40枚全体の保管方法については重ねた量感を吟味して保管場所を確保する必要がある(図5,6,7)。



図5 本額縁に小品を設置した状態



図6 40枚の箱状の額縁を重ねた状態



図7 40枚を平置きして並べた状態。内部の色は白の水性ペインキを使うが、この図は塗装前の状態

3. 額縁の制作についての木工芸の観点から

ここでは、作品を収める額縁について述べていく。額縁の図面を図8に記す。

はじめに額縁の仕様であるが、全体の寸法は縦470mm、横320mm、高さ55mmとしている。そのうち作品の収まる内寸は、縦420mm、横270mm、高さ39mmである。使用素材は枠材に米桺、背面パネルをMDF、表面にアクリル板を用いている。内部枠と背面内側には白色で塗装を行っている。

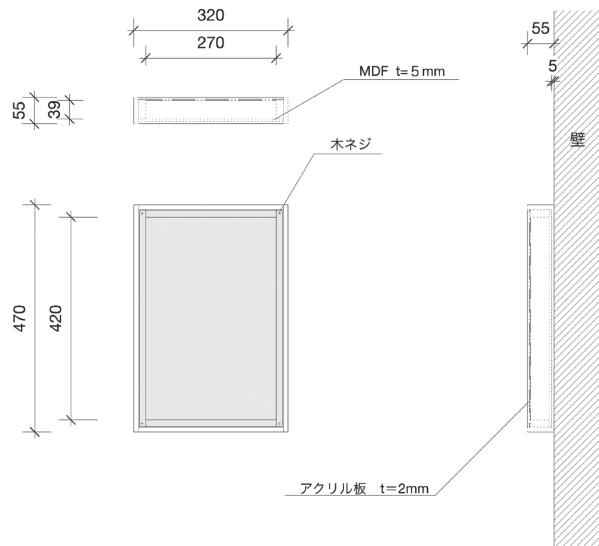


図8 オリジナル額縁の図面詳細

今回の額縁は、特に3つのことを考慮してデザイン、制作をしている。

まず1つ目は、「平面作品だけに限定しない額縁」であること。基本的には平面作品を収める額縁を想定しているが、ある程度の厚みのある作品についても対応できるように箱型の額縁とした。枠張のキャンバス等の厚みのある作品についてもそのまま額内に収めることができるように内寸の高さを39mm設けている。

2つ目は、「作品の入れ替えが可能な額縁」であること。将来、作品数が増えた場合、作品を入れ替えて展示をする必要がでてくる。しかしながら、一般的な入れ替えを想定した箱型の額縁になると、構造が複雑になり、制作工程が多くなる。そうなると制作コストも必然的に高くなってしまう。一般的な額縁の構造は、背面板を外すことで入れ替え可能であるが、今回できるだけコストを抑え制作できる方法として、表面のアクリル板を木ネジで固定する構造を採用した。木ネジを外し、アクリル板を取って作品を入れ替えることができる。表面から木ネジでアクリル板を留めているため、外観に影響するが、二重枠の構造にして、アクリル板を枠内に収め、背面と内部の枠を塗装することで体裁を整えた。

3つ目は、「額と壁の間に隙間が生じない額縁」であること。どのような方法で壁に額縁を吊り下げるかにもよって異なるが、壁にピンなどを打って吊り下げる方法であれば、壁からピンが出ている分、壁と額縁が離れてしまう。吊り下げている紐などもそこから見えててしまうため、見栄えが良くない。そのような問題を少なくするために、額縁背面にピンや紐などが収まる5mm程度のスペースを設けることで解決することとした。

4. 作品展示の候補になる壁面など

作品展示の候補になる壁面などをいくつか示しておきたい。山口大学教育学部の壁面と附属光学園の候補になる壁面、附属山口中学校の候補になる壁面を示す。

4-1 山口大学教育学部の壁面について

山口大学教育学部はすでに幾つかの場所で展示品がある壁もあるが、以前の建物改修の際に大きな絵画作品等は外してある。そのため特に作品を飾っていない壁が多く残っている。廊下や会議室等において可能な場所がある（左から図9, 10, 11）。



図 9 教育学部 C 棟 1F 中央階段踊り場部分



図 10 教育学部 C 棟 2F 中央階段部分



図 11 教育学部 A 棟 1F 玄関ホール部分、すでに美術教室卒業生の作品を飾っている場所

4-2 附属光学園の候補になる壁面について

展示場所として附属光学園では、3つの場所を選定した。1つ目の場所が、図12の職員室前廊下の展示スペースである。職員室は、生徒、教職員、保護者、来客者など様々な人が往来する場所であり、本校では、定期的に美術科の授業で制作した生徒作品を展示している。廊下で美術作品を気軽に鑑賞でき、窓から差し込む光も小品を展示するには適している。

2つ目が図13、14の階段部分の展示スペースである。階段から光市の御手洗湾を望む眺望と校舎前の花壇が見渡すことができ、季節ごとに四季折々の花々がきれいに咲き誇っている。学校前の豊かな景色と合わせて小品を鑑賞するにはもってこいの場所である。

3つ目が、図15の美術室後ろの展示スペースである。美術室の後ろの壁は、美術作品を飾る大きな展示スペースになっている。通常は、生徒が制作した絵画作品、ポスター作品や美術部が部活動で制作した作品を展示している。小品を展示することで、作品を鑑賞するだけでなく、美術科の授業の中で鑑賞教材としても有効活用することができるだろう。



図 12 職員室前廊下の展示スペース



図 13 1F～2F 階段の展示スペース

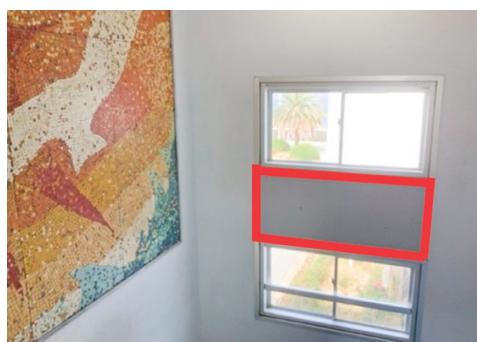


図 14 2F～3F 階段の展示スペース



図 15 美術室後ろの展示スペース

4-3 附属山口中学校の候補になる壁面について

附属山口中学校での美術作品の展示場所の候補は以下の場所がある(図16, 17, 18)。ただ、吊る壁として使用できない場合パネルを置いて設置する可能性もある。

図18は職員室前の壁だが、ここには吊るそうと思えば可能になりそうな場所である。いずれにせよそのような場所を候補に挙げた。



図16 ちゃぶ台ルーム横の壁



図17 階段踊り場の壁



図18 職員室前の壁

附属山口中学校では令和5年度から大規模な校舎改修が行われた。この改修工事は令和7年4月に全ての工期を終える予定である。本校での作品設置場所は改修によって新設された「ちゃぶ台ルーム」を中心に配置している。この「ちゃぶ台」とは山口大学に設置された「ちゃぶ台ルーム」からきている。保護者や地域の方など様々な人々とふれあうことができ、学校へ何らかの不安を抱えながらも教室登校を目指す生徒たちの一歩を後押しする部屋となっている。

また、本校は山口市内外から生徒を受け入れており、居住地域が広範囲にわたっている。イベント等でのつながりはあるが、日常的な地域とのふれあいは県内の他中学校に比べ少ないことが課題である。学校外、そして異年齢の作品を身近に見ることは、「ちゃぶ台ルーム」の利用者をはじめ多くの生徒にとって良い鑑賞の機会となり、作品をきっかけとした会話が生まれると予想される。今回のプロジェクトが地域連携の一助、生徒をはじめとした学校関係者の活力につながるようにしていきたい。

おわりに

このプロジェクトの発想の源泉には公共建築におけるインテリアとしての絵画やレリーフ、工芸品について改修や建て替えなどおそらく数十年に一度の更新がなければ、任意の場所に設置された大型の絵画などの美術作品について設置された場所を独占してしまい、また、大型の作品であることから保管場所もなく、置き換えるができないくなるという問題点から発想している。大学や学校、病院などの公共建築には善意による寄付や海外の姉妹大学などからのお土産、寄託作品などが集まりやすい傾向があるが、これは受け取った後の扱いに困るという事態も生み出しており、そのことをどう解釈し判断、公共空間に飾るかという問題は長らくその施設の責任者などに一任されていた。もちろんこういう状況について明確な判断基準を持って対応するということも可能であるが、ある程度の融通性を残しておくことも重要なことだと思う。

今回のプロジェクトはこのような状況に一石を投じたいこともあり、同サイズのユニットにあたる箱型の額縁を作り、美術作品のサイズも小品に限り、多くの作者の協力を得て、美術作品の作品群を作ることで、季節や状況により使用者の意向を反映させて掛け替え可能な仕組みを作り上げた。(注1)

今後は大学のゼミグループなどをを利用して作品のキュレーションや使用者の現場の意見を調査するなどしてさらに内容を向上させることができないかと考えている。これは美術館の学芸員のような要素もありまた、教育普及などの要素も持つアート・マネージメントとして教育に生かすことも可能であると考えてい

る。最後に附属山口中学校の事例にあるように、ちゃぶ台ルームの横など学外からの訪問者も鑑賞できる場所に設置することにより、学内だけではなく学外からの意見も反映させる仕組みも整備することで更なる可能性が生まれる余地がある。

全体の文章を中野が担当し、3. の「額縁の制作についての木工芸の観点から」を平川、4-2 「附属光学園の候補になる壁面について」を中村、4-3 「附属山口中学校の候補になる壁面について」を藤井が担当した。

注

1 これらの上述の問題意識の元、発想の元になったのは「四国こどもとおとの医療センター」におけるホスピタルアートの実践からである。ただオリジナルの額縁ユニットを作ることは本プロジェクト独自のものである。

参考 HP

四国こどもとおとの医療センター ホスピタルアート

<https://shikoku-mc.hosp.go.jp/hospitalart/index.html> (2025年3月15日参照)

謝辞

本プロジェクトにおける、オリジナル額縁の主旨を理解してくださり快く発注に応じていただいた有限会社矢次木工所、また旧市庁舎プロジェクト実行委員会、関係した全ての皆様にご協力いただいた旨感謝いたします。